

会 議 録

会 議 の 名 称 : 第2回向日市まちづくり審議会
会議の開催日時 : 平成21年2月4日(水)午前10時から午前11時45分
会議の開催場所 : 向日市役所 西別館 1階 第6会議室
会議の公開の可否 : 公開
傍聴者数 : 傍聴希望者なし
出席委員 : 6名
宗田会長・岡委員・山口委員・金田委員・岡崎委員・和田委員
配付資料 : 別添、資料のとおり
議 題 : (1) 第2次向日市都市計画マスタープランの改定について

議 事 録(概要)

宗田会長

定刻になりましたので、ただいまから第2回まちづくり審議会を始めます。

まず、審議に入る前に市長から本審議会に向日市都市計画マスタープランの改定について諮問があったことを報告します。

なお、今後の検討スケジュールについて事務局から説明があり、マスタープランの策定については、平成21年度中の策定を目指しており、今後、3～4回の審議を経て、当審議会から答申を頂きたいとのことでありました。

本日の会議は、お手元にお配りしております会議次第により進めます。

事務局から、議題である「向日市都市計画マスタープラン」の改定経緯、また、その概要について説明をお願いします。

事務局

三浦都市計画課長より改定(案)、改定経緯、内容等について説明
(説明内容については別紙、参照)

宗田会長

本日、配布されている資料 2については、改定案の主な内容を示したものであり、改定の視点と改定内容を示したものである。

それと、私の方からお願いして配った参考資料は、国土交通省の社会資本整備審議会の都市政策の基本的な課題と方向検討小委員会で審議したものである。

ご審議頂く向日市都市計画マスタープランの検討内容と同じ議論をしているので、一度、読んで頂ければと、資料として配付した。

審議に入る前に聞いておきたいが、「7.67むこう」というのはどういうことか。

岸部長

7.67というのは、市域の面積を表しており7.67平方キロメートルである。当時の向日市の特色として、単にコンパクトなまちというだけでなく「7.67むこう」って何だろうなという意識を持ってもらうよう第4次総合計画でサブタイトルとしたものである。

向日市の特色あるまちを出していこうとしたものである。

岸部長

総合計画の審議の進捗状況であるが、活力とやすらぎという二つの軸についても色々ご意見があり、まだ変わりそうである。

和田委員

総合計画の審議会については過去2回開催され、どこにでもあるようなイメージがまだ残るということで向日市の特色を出せないか、向日市が1200年前から、培ってきた魅力を前面に出すよう案を検討している。

岡委員

歴史性のある地域にもかかわらず、改定案では今どういうものがあるとか、どこにどういうものがあるとかが出てこない。

和田委員

いろんな分野があって、それを総括的にするのが総合計画となり、その中で文化財とか、色々な歴史的な関係については教育委員会の方で検討している。歴史的な関係について、都市計画マスタープランで書いていったらどうかということか。

三浦課長

都市計画マスタープランの中には基本的な課題の中に、地域の個性を生かしたまちづくりの記述がある。向日市には古墳群をはじめ、大極殿を中心とする長岡京遺跡などの記述があるので、今後、都市計画の方針、景観の中で活用等について具体的に表したいと考えている。

岡委員

どこのマスタープランも都市構造図というのを描かなければならないのか。地図を見ても実際にはどこにも線はない。ゾーンを決めると、問題となるのはゾーンとゾーンの間がややこしくなる。軸を設けると住宅地と軸の関係が一番問題で、大型店が立地するところと横の住宅地の関係が問題となる。

特にエリアの狭い向日市ではゾーン分けすることが問題とならないか。いろんな線を引いてゾーン分けをすると、いろんな問題が出てくるのではないか。うまくゾーン分けをしてまちづくりをやっている所を見たことがない。

宗田会長

今の、岡委員の2つの意見は大変重要な視点を含んでいる。そのために参考資料もつけた。今までの都市計画マスタープランのやり方を変えろと言われていた。今までは、人口増を前提に都市計画を作ってきたが、人口減少社会ではますますコンパクトなまちとなってきた。確実に人口が増えてくる産業となるなら、都市基盤を整備しろ、合理的な土地利用をということでゾーニングを図ってきた。さらに用途地域を設定してきたが、これからの日本はこれでは持つはずがないと言っている。

2000年頃は、美しい国づくり政策大綱が発表され、戦後一貫して社会基盤を整備してきたが、その結果、国民が満足するような美しい国ができたかということ、出来てない。何が美しくないかということ、社会基盤そのものが美しくない、これからは美しい国づくりに向けて大きく舵を切らないといけないと国土交通省も言っている。

都市計画そのものが見にくいものを創ってきたとも言っている。そのため、2004年に景観法を施行し、2008年歴史まちづくり法が施行された。その中でやっていることは、景観法は住民参加でやっているし、まちづくり法はまずは、自治体がまちづくりのコンセプトを画くことと言っている。歴史・文化はどこの町にもあるはずだから、まちづくりのコンセプトとしてどうなってくるのか、そこから画けと言っている。

それが都市計画マスタープランだろうということである。道を造れとか、駅を造れとかの時代に何処に

置くかを決めておかないと、どうにもならないということ。コンセプトを作って、こういう歴史・文化に基づいた風致・自然はこう守ります、歴史はこう守ります、こういうコンセプトで市民の了解を得た上でこの町の将来像はこうですと魅せたところに対し、国交省の推奨で認定を出すとか、まちづくり交付金を出すとか、補助金を出す。場所によっては補助金を出すことによって、美しい国土がどんどん変わってしまうから出せないところまでてくる。まず、まちづくりのコンセプトの認定するところから始まっている。都市における総合的かつ戦略的な政策として再考すべきと考えている。

山口委員

私は2つあると思う。1つは、経済力が無ければ持たない。経済力を強化するというので、土地を活用することは重要と考えている。もう一つは、近代都市計画というのは戦後の戦災復興で、全国一律に同じようなまちができてしまった。どうも、安上がりのまちになったのでないか。魅力のあるまちがなくなった。向日市は遅れているが、幸いなことではないかと思っている。大きな都市計画道路を縦横に走らせるのはやめて、前に見た向日市の原型を見つめ直す必要があるのではないかと、もう一度、再生するにはどうしたらいいのか考え直す必要がある。幹線道路をバンバン走らせるのか、くねくねと曲がった路地を歩いていると魅力的なところが一杯ある。最初、来ると迷うが路地を歩いているといいところがあり小さいけれどキラキラした良いまちにならないか。そういう、大事にしなければならないものもあり、長期的な戦略の展開も必要で、あわててやるより10年・20年・30年後には良いまちになる切り替えを是非やってほしい。

宗田会長

最初の都市経営の観点は参考資料の1ページに記載されているとおり、今後は、これまで整備した施設の維持管理が大きくなる。これに加えて、人口減少社会になると、国交省とか自治体が道路とか橋の維持管理が大変になる以前に民間企業の方が厳しくなる。いわゆる橋を直す以前に、潰れかかっている民間企業を救ってあげるとか、生活扶助をだすとか、人間が生きていく方にお金を使わなくてはならなくなる。道路なんて、一番、最後になることもあり困ることはわかっている。今の内に、道路は潰しておこう、橋は潰しておこうということも考えられる。逆転の発想で、他市では負担のかかる施設を撤去し、更地にしたところもある。まちづくりとは何かを考え直す必要がある。

山口委員

幸い、向日市は面積が狭いから、そういう無駄はしなくてよい。むしろ、その狭さを活かしたら良い。これからは、そういう発想に立ち返る必要もある。旧市街地こそ魅力がある。かつて細街路プロジェクトもあった。

宗田委員

路地を活かしたまちづくり、歴史的まちづくりを考えてもよいのかもしれない。

和田委員

向日市は小さい街で、全域に都市計画道路を整備する必要があるかは見直す必要があり、市域の都市計画道路の見直しについて検討を進めているが、隣接市との協議調整が必要であり見直しは本市の意向どおりには行かない。市域は狭いが、駅が5つもあり駅に繋がる最低限の道路整備でいいのかもしれない。

宗田会長

都市計画道路は、広域的連携で計画されているので、整備については国交省の方針が変わったけれど、府の指導としてどうなるかは不明な点が多いように思う。

山口委員

都市計画道路は、計画決定すると大変である。見直したらいいのは判っているが、計画に縛られずほっておいたらどうか。住民に色々な影響がでてる。

宗田会長

都市計画マスタープランの交通体系から考えると、都市軸を広げるという前提できている。本当に、その方法しかないのか、十分検討する必要がある。

金田委員

先ほどの話で、ゾーンを決めるとその境付近はグレーゾーンとなって、あいまいとなるとのことであったが、逆の考え方もあって、いい加減な状況があると個々の開発時にはトラブルが多くなる。そういう、決め方をしていると、実際、そういう街となってしまう。用途に応じて、人が住んでいくようにするのが良いのではないか。それぞれの用途毎の環境が整備されていくので、その地域のエネルギーを壊さないように計画するべきでないか。それが向日市が発展することにつながる。用途の混在より、はっきり線引きした方が良い。工業に住宅が入ってくると最後には工場は出て行けとなる。住居は住居、工業は工業としての線引きをすることによりインフラ等もそれに適した整備がされるはずである。

宗田会長

そういう、考え方のもとにゾーニングしたがうまくいかなかったのは、工業・商業といってもバラバラになってしまった。何をもって規制するのか判らなくなった。

金田委員

まだ、細かい部分は結論が出せていないが、向日市は人口が多くてエネルギーは多いと思う。多い人の活動を助けるためには、道路を広げることも積極的なことだし、イメージ的には京都の御池通が綺麗と思う。電柱がなくなり都市軸があんな風になっていったらと思っている。もちろん、細かい部分は道路を広げるだけでなく色々あると思うが、道路の種類によっては、パターンに分けて整備する方法があるはずである。

岡崎委員

2020年を目標に都市マスの見直しが行われるが、人口減少の世の中になる中でお年寄りの方が増えていく。向日市は住んで良かった街を目標にしている。寺戸地区では人口が集中し建物も一部違法建築もある。建ぺい率や容積率を工夫して、やさしいまちづくりができないか。

宗田会長

岡崎委員の意見は、容積率を上げて地域の活性化が図れないかと言うことであるが、木造3階建てがどんどん建っていくことは決して良いことではない。

宗田会長

人口フレームであるが、2035年までの人口予測を国立社会保障・人口問題研究所が出したところである。向日市の人口についても予測されているが、2035年には49,987人と減っていく。

あえて、人口フレームにこだわる必要はないが、10年・20年ぐらいの間に高齢化率も上がり、2軒3軒家を持っている人が多くなる。今、開発された住宅地がその頃には動き出して、建替えた方が良いとなった時にどうするかだと思う。

岡 委員

連旦した市街地なので、人はどんどん流れ出す中、定住といいながらどういう人に定住してもらうか。住む人を選ぶように、まちを作っていくといけない。向日市に住んでいるといったら、良いところに住んでいるね。と言ってもらえるような気持ちでいけないといけない。

山口委員

人口減少するから、住むところを選択することになり、良いところに住みたいとなる。

その時に、向日市がどういうものを「売り」にしていくのかが問われる。

和田委員

向日市は昭和30年代後半から京都市の周辺都市として人口増加が進んできた。急激な人口の増加に追われて、計画的なまちづくりである都市計画が遅れている。昨年、まちづくり条例も施行され、一つには今までの狭い敷地ではなく余裕のある敷地となるよう指導を厳しくしたところである。人口減少となっても、魅力あるまちづくりが必要である。

宗田会長

京都市内でも、人口減少に伴う空き家が増えて町屋など変な使い方をされ、火災が増えているため空き家をなくしていかないと災害が増える。不動産業で空き家になった所を買い取って流通させてくれるような人がいたら良いと思うのだが。

岡崎委員

なかなか、空き家になった所をうまく流通させるのは難しい。相続問題とかの権利関係がネックとなって進まない例が多い。

宗田会長

プロの民間の力を期待したいところである。

山口委員

20ページの都市構造図を見ていると、都市経営として市の収入源はどこにあるのか。狭い範囲で限られた土地利用の中で、収入源を見つけるとすれば何処にあるのか、私は田園緑地ゾーンを注目している。環境的には緑地として保全するのは良いが、そんなことを言っている状況でない。もう、一点、歴史・文化軸は向日市の成り立ちを物語る西国街道であるが、都市軸の中に包含されており、まったくニアンスを感じない。向日町停車場線の整備の観点ではゼロであり、京都府に都市軸としての向日市の考え方を明確にする必要がある。

和田委員

山口委員のとおり、再編につながる周辺の関係は向日市にとって重要である。キリンビールの撤退やこの西側区域の8ヘクタールについては JR 桂川駅もできたことから、市街化区域に編入し向日市にとって起爆剤となるようなまちづくりを目指している。同じく、向日町駅の東側についてもどのような土地利用ができるか考えている。人口が減っているのに、収入はどんどん減っているのに、この2カ所とキリン跡地を中心に市として何ができるか考えている。

歴史文化の関係については、都市軸の向日町停車場線の向日町駅から東向日駅西側までは西国街道となっている。途中で寺戸川があり歴史のある橋なので道路が広がる時には、歴史を感じるようなものにしていきたいと考えている。

宗田会長

向日市の場合は、歴史的なものは残っていない、道路はできていない、市民は理解していない、ではよほど根底から考え直さないといけない。これでは20世紀中頃の状態である。歴史的関係を出すことがまちの経済的發展に繋がることを理解されていない。今のままで、工場を建て人口を増やせば財政は持つと思われている。

岡 委員

市街化調整区域を一部はずしたと聞いたが、向日市の魅力は残された農地・緑地ではないかと思っている。工場にするより、農地にして地元で出来た野菜を食べられるのが、向日市の魅力づくりにな

る。都市計画図を見て黄色(第1種住居地域)くなってしまったひどさを考えると、白(市街化調整区域)で保ってきたところの良さを出しながら、黄色の所のようにならないようにするのが、これかのまちづくりではないか。そういうことを考えたとき、将来都市構造図の中の言葉であるが、並の言葉でなくて向日町駅がどうして都市拠点なのか、駅前ではないか、その程度でいいのでは、みんな知っている。農地についても、田園緑地ゾーンではなくて、「農地」「田んぼ」とかの言葉づかいでも良いのでないか。絵を作るときに、工夫できないか。

宗田会長

重要なご指摘である。今までの都市計画がいかに虚構であったかということである。

山口委員

農地の問題はそのとおりである。私は、どうしてこの町が萎縮してきたか見えている。以前は、農地を残して生活するスタイルであったが、街中は貧乏でどうしようもないというのでは困る。歴史文化が魅力的なまち、結構良い人たちが住んで豊かなまちか、どの線でいくのかである。

宗田会長

かつての成功体験が障害となっている。

山口委員

西向日駅前の住宅開発を行ったのは阪急電鉄であったが、線路を引くと沿線の土地利用をしてもらわなければ乗客が増えないから、絶好の農地を住宅地にしてしまうため中間階級向け街区を点々と造っていった。だけど街中が貧乏では困る。先程言ったどの路線で行くかである。

宗田会長

地権者がいたから、中途半端な絵しか描けなかった。

岡 委員

郊外のレストランでも土地利用・建築物に制限が多く中途半端な規制がある。高級レストランが住宅地の中にあれば好いという場合もある。

宗田会長

風致地区とか歴史的景観地区は100年たっても風景が変わらない。中途半端な郊外にはパチンコ屋はある、マンションはあると無茶苦茶なところが多い。

岡崎委員

住宅地は、これ以上に人口が増えない。市内の土地についても工業専用区域を設けるとか、企業誘致を図るとかの工夫が必要ではないか。人口が減っていく中で、きれいなまちづくりをしても、人が来てもらえなくなるのでは困る。向日市にお金が落ちるように、住宅地よりも、そういう工夫が必要と思う。

宗田会長

人口が減っては、住宅地の需要も商業地も厳しくなると言うことである。

金田委員

環境のいい街というのは、住むことだけが仕事になってもいけない。外で働いて収入を得なければならぬ。収入を得るためには、商業的なもの工業的なものも必要である。向日市にも、そういうもののバランスが大事ではないか。

宗田会長

納税額は、事業所からの収入のバランスと住民からの税収とのバランスが、どのように組み合わせれば最大となるかである。それが、最大となる事業所の構成が用途地域の面積の張り付けとなるので

はないか。今では、その様に計算できない部分があると聞いている。納税額が昔のように計算できないため、どの辺を集めていくのが難しい。

時間も経過し、方向性を考えていかないとならないが第3章までの検討はこれでいいとはなっていない。

三浦課長

都市マスの案は、上位計画の総合計画の審議を踏まえておろしてきているところがあり、基本的な考えは総合計画で検討されるものである。

宗田会長

本日の意見として、歴史を活かした街を考えていくコンセプトを市民の皆さんにも訴えて行かないといけない。また、人口減少社会をもう少し現実的にとらえていき、居住生活を良くし市民を引き付けつける「住みたくなるまち」を考えていく必要がある。

今日の議論を踏まえ、次回には第3章までをまとめる。

事務局

次回は、3月26日午後に開催予定。

以上